

カーボンニュートラル 2050年実現

所ジ設と開向%○を「実ラ

N、温室効果ガス排出量実質ゼロ)へ
けて、21年2月に「J-POWER
E MISSION 2050」
た。まず30年時点の二酸化炭素(CO₂)
量を17~19年度の平均実績比で40
を目指す。さらに50年のCN実現に
国内外で再生可能エネルギーの新規
大する。こうした取り組みの試金石
が、日本の電力会社として初めて建
ら参画した海外の大型洋上風力プロ
トライトン・ノール洋上風力発電

ハ
ワ
ー



ジョン・ノール

事業を統括する飯塚俊夫
営業部再生可能エネル
ギー開発室長は「主要機器
設計・施工などの技術面
もとより、洋上での安全
性や様々なリスク管理、
済不順やコロナ禍など難
い局面での工程確保など
ることは多かつた」と振
返る。

分割し「コスト削減

このプロジェクトで際だ
たのは分割発注によるコ
スト削減だ。海外の大規模
プロジェクトでは設計から
達、建設までを一括して
貰うEPC契約が一般的

海外案件 積極化

エース部分。事前に洗底して洗いラクターと、対策やコス



安全管理や洋上でのリスク管理など、大型洋上プロジェクトから学ぶことは多かった」と話す飯塚Jパワー再生可能エネルギー開発室長

洋の海に据え付けたの
本の支柱を打ちこむモ
ル式の風車。作業船
を分の風車発電機資材
と、1日に1基据え付
約9日で港に戻る。洋
々力所の変電所で22万
升圧し、約50キロ先の
地点まで海底ケーブル
を走する。「陸上部分の
川のケーブルは、全区
地中埋設して敷設。こ
の地域住民の理解も得
かった」（同）。

海外では豪州の陸上
を開発するほか、アゼ
はじめ、風況の良い洋
力の成長市場での案内
を目指している。

「これからは当社
を生かすことができ、
収益性も高い開発初期
から事業参画してい
い」（同）。この際
にはないトライトン
ルで学んだ経験が生き
る。

・内国を河川維持地化して、上風力を洋上風シアを獲得した強み段階引き他社にくまく・

ン・ノール洋上風力でノウハウ蓄積

電源開発